

令和2年度 of 取組の概要

学 校 名	大崎市立古川第一小学校	主な取組教科	算数科	
研 究 主 題	学ぶ楽しさを実感しながら確かな学力を身に付ける児童の育成 —数学的な見方・考え方を働かせて学び合う算数科の授業を通して—		研究年次	2 / 3年次

1 今年度の主な学力向上の取組と成果

学力向上の取組	成 果	評価の根拠
児童の問いを引き出す問題提示や発問の仕掛け ① 既習事項とのずれに気付かせる。(導入時) ② 児童に問いをもたせる。(導入時・展開時) ③ 新たな問いが生まれるような発問を行ったり、切り返しの発問を行ったりする。(展開時)	<ul style="list-style-type: none"> 児童に考えの理由を問い、問いを引き出したり、見通しを持たせたりすることができた。 条件不足の問題や日常生活に関連した問題を提示し、児童の興味を引き、知的好奇心を高めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 条件不足の問題や日常生活に関連した問題を提示することで、「解いてみたい」という意欲が高まる児童の様子が多く見られたり、数量に着目し意欲的に自力解決する様子が見られたりした。
確かな学力を高める集団解決の仕掛け ① 「数学的な用語」「式」「図」などを用いて、自分の考えをノートに書かせる。(展開前半時) ② 教師がコーディネートし、児童の発言・発表をつなぐ。(展開後半時) ③ 誤答や誤認識を生かした学習を取り入れたり、立式等の意味を考えさせたりする。(展開後半時)	<ul style="list-style-type: none"> 自分がやりやすい方法を使って解決できるようになってきた。(図、式、言葉等) 立式について、その理由や説明を述べるようになってきた。 集団解決や、ペアやグループでの学び合い活動によって、思考の広がりや深まりが見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自力解決直後や集団解決後のノートの記述から、自力解決時の表現方法の上達や、理解の広がり、深まりが読み取れた。 児童の意識調査では、友達との学び合いによって、問題を解決したり、新しい考え方に出会ったりすることに楽しさを感じていると回答した児童が多く見受けられた。

2 残された課題・要因と今後の方向性

課題・要因	今後の方向性	
課題：数学的用語の使用が少なく説明する力が弱かった。 要因：数学的用語を意識した板書や掲示物になっていなかった。	<ul style="list-style-type: none"> 数学的用語をより意識できるような掲示物の作成や、研究の視点の設定が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 双方に共通して、左記の達成状況を客観的に把握するための評価の在り方を明確にする。
課題：教師主導で授業を進めてしまう部分が多く、教師が話しすぎしまった。 要因：集団解決での有効な問い返しの方法について吟味していなかった。	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いの場の設定における成果や課題を整理し、各学年の発達段階によって、有効な場の設定や発問、問い返しの仕方を検討する必要がある。 	